

研究成果報告書

2012年度「スラブ・ユーラシア地域(旧ソ連・東欧)を中心とした総合的研究」

今西一（小樽商科大学教授）代表「北東アジアのコリアン・ディアスポラ」

まず、2012年に刊行された今西一編『北東アジアのコリアン・ディアスポラ』（小樽商科大学出版会）の書評会を、評者として水野直樹教授（京都大学）と半谷史郎教授（愛知県立大学）を招き2012年8月18日に北海道大学にて開いた。同書掲載の本共同研究関係者の各論文に対して、水野教授からは、今西論文における資料考証について、半谷教授からは、天野論文におけるソ連少数民族政策について、および中山論文における議論の自覚的限定性について議論が提起され、本共同研究を進める上で大いに参考になった。

中山は、前掲『北東アジアのコリアン・ディアスポラ』での成果を基に、サハリン韓人（朝鮮人）研究に関する研究ネットワークの構築のために、スラブ研究センターの岩下明裕教授がコーディネーターを務め同教授が代表を務めるGCOEプログラムがバックアップしたBRIT(Border Regions in Transition)2012に参加し関連報告を行った。釜山で行われた特別セッション Korean Special では、前掲書の執筆者であるディン・ユリア氏（ロシア・サハリン国立大学、韓国高麗大学）や、韓恵仁氏（韓国建国大学）のほか、在外韓国人研究を行っている李定垠氏（韓国聖公会大学）が関連報告を行っており、同セッションのコーディネーターである池直美氏（北海道大学公共政策大学院）の仲介でこれら研究者と交流を深めた。ディン氏とはBRIT閉会后に共同でサハリン韓人帰国者永住施設を訪れ、同所老人会の新会長を中心に、現況に関する聞き取り調査を行った。その後、関西へ移動し、関西の大学院に在籍し、自身もサハリン韓人研究を志すサハリン韓人3世から、聞き取り調査や研究情報の交換を行った。単に研究ネットワークを構築しただけではなく、上記の韓氏および李氏とは、「韓人」「帰国者」という用語等をめぐっての議論や、所謂「4万3千人説」（「樺太裁判」などで採用された終戦時のサハリン韓人の人数）の真否についてなどの歴史的事実に関する相互の認識の確認も行えた。今回のネットワーク構築は、今後サハリン韓人研究者間の国際的交流や共同研究を進めるための重要な土壌となると考えられる。

天野は、前掲『北東アジアのコリアン・ディアスポラ』での研究成果の追跡調査のため、2013年2月26日～3月6日にかけてユジノサハリンスク市を訪問し、国立サハリン州歴史文書館で1945～1949年の時期にかけて資料調査をおこない、サハリン島をめぐる戦後の人口移動に関する史料を閲覧した。日本人の帰国だけでなく、朝鮮人の帰国可能性も相当の可能性をもって議論されていたことが判明した。日本人の帰国プロセスも、朝鮮人の帰国可能性も、それを規定していたのはまずソ連大陸部からの移住の進展状況であった。朝鮮人については、北朝鮮への移送が検討されていたが、朝鮮戦争の勃発によって結果的にその可能性は閉ざされた。ここで得られた研究成果は、今後、サハリンおよびモスクワ等でのさらなる追加調査を踏まえて、論文として発表する予定である。